

■（４０）徐々に復興進む被災地の「住所」

その封筒の差出人住所は「〇〇高等学校第二グラウンド仮設住宅7-△」とあった。仮設住宅の建設が進み、一部の避難者は体育館などの避難所から移りつつある。それに伴い被災地ならではの「仮の住所」が出現している。郵便物や宅配小包はきちんと配達される。

住所だけみても、被災地は少しずつ変わりつつある。震災直後に被災した高校の国語教諭がつづった日記にも住所の話題が登場する。「今はどこも『ガレキ町ガレキの〇〇さん』…。岩手県大船渡市や陸前高田市の惨状を嘆いた。どこにどのような建物があったかもわからないまちで、住所なんてまったく意味をなしていなかった。その後、新聞記事で被災者を紹介する場合、その人の住所は「避難所」になった。紙面に登場した人らに向けた多くの支援物資や励ましの手紙が、その住所に届くようになった。そのやりとりを通じて、被災地の人々は、極端に言えば、世界の人とのつながりや絆を実感している。

被災地のまちづくり構想では、津波で浸水した地域には、住宅を建てない方向で検討が進んでいる。震災前に使っていた住宅の歴史ある「住所」は消えてしまうのか（山）